

ぬえづか 岡崎グラウンドの「鶴塚」

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

1991年秋から約1年間かけて、左京区岡崎最勝寺町の岡崎グラウンドで発掘調査を実施しました。ここは「白河街区跡」と称され、平安時代後期に天皇や上皇が御所や寺院を次々と造営された所で、調査地はそのうちの「最勝寺」の推定地にあたります。

今回の調査では最勝寺の遺構は明確にできませんでしたが、この時代の遺構として、二条大路末の北側築地とみられる地業遺構を検出しました。

「鶴塚」は古墳であった

築地遺構の北西で古墳を2基確認しました。ともに主体部は削られていましたが、周囲をめぐる溝から古墳と判明したものです。南の1号墳は直径が約20mの円墳で、周溝の幅は6～10m、時期は6世紀の中頃から後半とみられます。北の2号墳は周溝の北側が削平されていましたが、直径12～13mの円墳として復元できます。これらは後高倉太上天皇の陵墓参考地で、通称「鶴塚」と呼ばれていたものであることもわかりました。

「鶴塚」の鶴については『平家物語』の中に有名な一節があります。近衛天皇と二条天皇の時に、内裏に妖怪が出没し天皇を悩ますので、源頼政に退治を命ぜられました。頼政が弓で射落したところ、頭は猿、胴体は狸、尾は蛇、手足は虎



岡崎グラウンドの調査風景（西、上空から）

手前のまるくめぐるのが古墳の周溝、その上で蛇行するのが自然流路。右端には東西方向の地業遺構がみえる。交差点の先には法勝寺の金堂が位置する。

の姿をした妖怪であったという説話です（右図参照）。また、同じ箇所には「東三条の森の方より、黒雲一むら立ち来って…」とありますから、内裏からみて東方にある怪しげな塚、つまりこの付近の塚が鶴の棲む杜、あるいは鶴の塚として伝承され近年に至ったのでしょうか。

この「鶴塚」は明治27年1月に後高倉太上天皇の御陵伝説地に指定され、のち陵墓参考地になりました。昭和30年にはグラウンド整備の目的で発掘調査され、塚上に



鳥山石燕『今昔圖説続百鬼』を模写

中世の小坑と掘り込みがあったと報告されており、現在は伏見区深草の月輪南陵下に移されています。

「鶴塚」を迂回する

今回の調査で、二条大路末の北側築地と古墳が明らかになりましたが、これらの事からどのようなことがわかるのでしょうか。

二条大路末の築地遺構は、この古墳を壊さず手前で終わっていることがわかりました。これは、墳丘がまだ存在していたため、意識的に残したものと思われます。

次に、鴨川の西に広がる平安京から洛東岡崎に至る行程については、当時の貴族の日記に散見されます。藤原定家といえば『新古今和歌集』の撰にも加った鎌倉時代初期の著名な歌人ですが、彼の日記『明月記』にもこのことが細かに記されています。

その一つ、建暦二年(1212)一月九日の御幸では、「大炊御門を東、洞院を南、二条を東、河原より押

小路に入る。得長寿院の東より尊勝寺・最勝寺の北を経て法勝寺西大門に入御す。毎事例の如し」と記していますから、一旦押小路に下がり、さらに北に迂回して尊勝寺の北から法勝寺に入ったことがわかります。

建保元年(1213)四月二十五日の記事もよく似た道筋を述べています。これはなかなか興味深いので図上に復元してみました(下図)。

日記には「三条、東洞院、大炊御門を経て尊勝寺の東を南行の間、冷泉を過ぎ二条に赴く。不審ながら相隨うの間、前陣は二条を東行す。この路は仰せ下さる所か問う。本は冷泉を東と承るに今はかくの如し。二条東は古来より憚られる路なり。今仰せらる所は又冷泉と。急ぎ還御せらるべし。…御車未だ御あらざるの間、冷泉を東に(法勝寺)西大門大路を南行し、阿弥陀堂南門に入る」といった内容が記されています。ここで注目され

るのは二条まで達した一行が、慌てて引き返していることです。その理由を定家は、「二条東は古来より憚られる路なり」としています。一体何が憚られたのでしょうか。

岡崎御幸の記事は、この『明月記』以外にも、『山塊記』や『中右記』などにみることができます。しかし、どれをみても尊勝寺・最勝寺の北から法勝寺に入っています。どうやら、当時は二条をそのまま東へ向う行程は採用されなかったようです。

こうした不自然な行程と今回調査で見つかった古墳とは、大いに関係があるように思われます。つまり、大きな塚は築りのある所とみなされ、御幸の行程を北に迂回させたのではないのでしょうか。

不気味な塚への恐れが、やがて「鶴塚」の信仰となってこの古墳に定着しました。このことが近年まで古墳を破壊から守ってきた要因だったのです。(丸川義広)



『明月記』建保元年(1213)四月二十五日条から復元した岡崎御幸の行程図

この日は七条院が三条殿から岡崎法勝寺に御幸された。それに随行した藤原定家の日記をもとで作成。